

ヒロシマの声

4

被爆から60年

「被爆体験の風化を止めなくては」「教育現場での平和教育の現状を知りたい」

七月三日、原爆資料館(広島市中区)で開かれた「第一回コンセンサス会議」。大学教授や被爆者らと、公募で選ばれた市民が「ヒロシマが担う役割」について意見を交わした。今秋まで会議を重ね、計十二人の市民が平和の思いを「提言」にまとめる。

「会議に落としどころはないが、議論を通じて市民が思う平和を形にするプロセスが重要」。企画した市民グループ「ワールド・ピース・ヒロシマ」の前島修代表(三〇)同市南区は力を込める。

前島代表は山口県出身。被爆とは直接関係はないが、大学卒業後に広島市内で就職し、「市民がヒロシマ

変わる聖地

を十分に発信し切れていない」と感じたという。二〇〇一年の米中枢同時テロを機に同年代の男女三人で活動を始め、コンサートや折り鶴制作など市民を巻き込んだ活動で平和発信を続ける。

今回の「提言」は国や広島市に出し、ホームページにも掲載する方針だ。前島代表は「若い世代を中心に新しい流れを作りたい」と話す。

× × ×

戦後一貫して「反核・平和」を訴えてきたヒロシマ。核兵器廃絶を願う「聖地」で今、被爆者主体だった平和運動の枠組みが変わりつつある。

その一端が、原爆資料館が一九九九年に始めたボランティアガイド。現在は目標にほぼ近い約百七十人の市民が登録。「大半の人が『何かの

平和発信へ新たな担い手

形で平和のために役立ちたい」と応募している」。同館は市民に根づく

平和意識の存在を強調する。ここ数年、従来と違う手法で平和

慰霊と平和への願いを込め、石こうで「合掌」した手の跡の作品を釣り



白い石こうで「合掌」の手の形を表現した「ホワイトプロジェクト」は七月三十一日、平和記念公園

を訴える「新機軸」の活動も目立つ。広島芸術専門学校(広島市中区)などが〇二年から平和記念公園(同)の平和の灯近くで七月末に行っている「ホワイトプロジェクト」もその一つだ。戦争犠牲者への

市民参加の枠組み広がる

糸でつるす。今年は子どもやお年寄りなどから寄せられた約三百八十点を展示した。制作責任者の美術家新田和成さん(五〇)呉市は「民族や宗教などの違いを超え、平和を願う人々の思いをアートで結びたい」と説明する。

× × ×

こうした中、〇〇年に広島市教育センター(広島市東区)が市内の小中学生に実施したアンケートで、原爆投下年月日と時刻を正確に答えられたのは五年前の調査と比べて10・20%も減少。「ヒロシマ」の風化は進み、確実な転換期を迎えている。

広島市立大広島平和研究所の田中利幸教授(戦争犯罪史)は「原爆被害の特殊性ゆえに、平和運動が反核運動からより大きな運動に広がりにくい側面はある」と指摘。「被爆者がいなくなった時にヒロシマをどう継承するのか。平和教育も含め、一人一人が真剣に考える時期にきている」と被爆六十年の持つ意義を訴える。